Book Review 18-8 警察小説　＃恩送り

『＃恩送り 泥濘の十手』（麻宮好著）を読んでみた。著者は大学卒業後、国語の塾講師を務める。本書で第一回警察小説新人賞を受賞。

時代小説であるが、警察小説新人賞を受賞しているので警察小説に分類した。捨てられた子供、女中に養育された子等、親から見捨てられた子供らが育ての親に暖かく育てられ、その３人の子供（一人は絵心があり、もう一人は目が見えないが聴覚と嗅覚に優れ、主人公の娘はやる気と度胸がある）が、付け火の犯人探しと失踪した岡っ引きの養父の行方を探す物語である。

手がかりは養父が残した漆で塗られた謎の蓋。器の身はどこにあるのか?　ある日、大川に若い男の土左衛門が上がる。袂から見つかったのは漆塗りの毬香炉で、妙なことに蓋と身が取り違えられていた。身元は薬種問屋相模屋の跡取り息子。養父の遺した蓋と土左衛門が遺した毬香炉は一対だったと後に判明する。この一対の毬香炉は果たして誰のものなのか?火つけ犯は誰か？養父は生きているのか？

謎解きとは別に、事件を追う中で、血のつながりのない親に育てられて幸せを感じるようになった子供の心情を描き、作者はこの幸せを「恩送り」で繋げてゆくことが大事であると主張している。すなわち、恩送り（Pay it forward）とは、受けた恩をその人に直接返すのではなく、別の人に渡すこと。恩をくれた人ではなく、次の人に渡すことでバトンを繋いでいくことを意味する。所謂、贈与をどう返すのか。

＃マルセル・モース（1872-1950)が唱えた『＃贈与論』は、贈与と交換をめぐる社会学的・人類学的研究成果である。これは贈与と交換を中心として社会のあり方を考究する哲学的な思索においても影響を与え続けている。
　モースは、同時代のいわゆる未開社会（ポリネシア、メラネシア、北米大陸北西沿岸地域など）に事例を求めるとともに、高文明のアルカイックな形態（古代ローマ、古代ヒンドゥーなど）も綿密に調査し、贈与にもとづく交換関係がこれらの社会においては優越していることを論証している。

モースは結論として、人間（社会）は、自分だけで自足することができず、他者に開かれていることが必要であるという問題意識に帰着する。それ故、贈与にもとづく交換関係にこそ「人間存在の基底」があると見ている。すなわち、

人間が個人的にも集団的にも自分の内部に閉塞するのではなく、「自分の外に出ること」に人間存在の基底があると主張する。さらに、市場原理を一方に見据えながら、贈与にもとづく交換関係を復権させることに近代社会の将来的な希望を見いだしている。

私は研修医や医学生に講義をした最後に、「贈与を受けたと思いなす力」の重要性を力説している。「価値あるものをもらったと思ったら、返礼をしなければならない」ということがすべての人間社会の根幹になっているということである。マルセル・モースは言う。「贈与は義務を伴う。社会的制度として組み込まれている」。これは「恩送り」と同じことである。「これに価値があると思う人が出現したときにはじめて価値もまた存在し始めるのであって、それに気付かない人も多い」。医師は自分の力だけで医師免許を勝ち取ったのではない。家族・友人・国民からの支援があってはじめて医師としての歩みが始められるのである。